

[書 評]

## 民間学を継承する

花 田 史 彦

（大手前大学・同志社大学・立命館大学）

### 1. はじめに

本稿では、菊地暁・佐藤守弘編『学校で地域を紡ぐ——『北白川こども風土記』から』（小ざ子社、2020年。以下、本書）の書評を行なう。

なお、本書についてはすでに金田章裕<sup>1)</sup>、和崎光太郎<sup>2)</sup>、石原俊<sup>3)</sup>の手による簡にして要を得た書評が出ている。また本稿は、複数の評者による「クロスレビュー」のうちのひとつであるため、全体をまんべんなく紹介し論評するというより、あくまでも評者の関心に引きつけるかたちで書かれたものであることをあらかじめ断っておく。

### 2. 本書の構成

面白いことに、本書はなかなか序章にたどりつけない。まず分析対象である京都市立北白川小学校編『北白川こども風土記』（山口書店、1959年）の抄録、次いでその制作経緯を語った当事者（北白川小学校の元生徒）の証言「北白川こども風土記の出来るまで」が合計約80頁にわたって立ちはだかる。「とりあえず何も言わずに『北白川こども風土記』を読むべし」という気迫が伝わってくる。資料と初めて出会ったときの驚きも含めた「研究プロセス」まで読者と共有するための工夫であろう。

ようやく、序章「学校で地域を紡ぐ」（菊地暁）にたどりつく。ここで『北白川こども風

土記』とそれが生まれた時代背景について、述べられていく。『北白川こども風土記』とは「京都市立北白川小学校の児童たち四八人が、課外学習で郷土・北白川を調べ、書き記したものである。児童が自ら書いた第一級の「地誌」であり「郷土史」であり「民俗誌」（89頁）である。

ただし単なる一地域・一学校にとどまる実践だったわけではない。「こども風土記」という名称自体は、1941年に柳田国男が『朝日新聞』紙上で連載した「こども風土記」（「わらべ歌、鬼ごっこ、ままごと等々、子どもにまつわる伝承の数々を自在に論じた」〔104頁〕ものだったという）にはじまる。そして同種の本が戦時下においては日本の植民地や占領地にまで波及、戦後も日本各地で数多く編まれることになる。

つまり「こども風土記」とは作品名（の一部）であるだけでなく、巨大な「ジャンル」のことだった。『北白川こども風土記』もまた、そのような広がりの中かで把握すべき素材として定位されている。

そうした「ジャンル」としての「こども風土記」の広がりが、コラム1から3で具体的に明らかにされていく。とくに小学校で編纂された「こども風土記」の発行年代のピークが1980年代であるという一色範子の指摘（147頁）は興味深い。「1950年代」に力点を置きがちな戦後史研究を相対化する視点が示

されているのではなからうか。

このようにして全体像の提示が丁寧に行なわれたのち、いよいよ第1章である。ここからは、『北白川こども風土記』そのものの分析、あるいは同書の成立を可能にした条件の分析に焦点が絞られていく。

第1章「京都市立北白川小学校の郷土室」(村野正景)では「郷土室」という学校内施設の存在に光が当てられ、そこに数々の地域資料が集められ展示されたことが『北白川こども風土記』成立の契機であったと考察が行なわれている。

第2章「地域のちから」(堀内寛昭)では北白川小学校創立八〇周年(1954年)の記念事業について論じられ、学校外の地域住民から多額の寄付金が集まったことが明らかにされている。これは地域住民の教育熱を示すものであり、実際に北白川小学校の教育環境を充実させた。

そうした空間的、あるいは経済的な条件に加え、第3章「〈先生たち〉〈おじさんたち〉と地域の歴史」(黒岩康博)では「地域の知的先達」、すなわち京都大学をはじめとした「大学の先生や有識者」(〈先生たち〉)と、「土地の古老」(〈おじさんたち〉)の存在に着目している(221頁)。高度経済成長期にあつていまだに「江戸の記憶を有する家の人物」(235頁)が生徒たちの身近にいたことも、『北白川こども風土記』を可能にした条件であった。

つづけて第4章「戦後社会科教育と考古学」(石神裕之)では、戦後の社会科教育と考古学という観点から北白川の知的基盤が検討されていく。『北白川こども風土記』と無着成恭編『山びこ学校——山形県山元村中学校生徒の生活記録』(青銅社、1951年)とを比較したうえで、後者には「遺跡や史跡、習俗を調べた内容を記述するといった郷土学習的要素は見当たらない」(245頁)という指摘も行なわれている。

順番が前後するが、コラム6、7はそれぞれ哲学者の上山春平と考古学者の小林行雄を

素材としたもので、第3、4章で述べた北白川の知的基盤についてのケーススタディーということになるだろう。

このように、北白川という地域の地理的・経済的・文化的な諸前提のうえに『北白川こども風土記』という本が成立していたことを明らかにしたうえで、次に『北白川こども風土記』のテキスト分析が行なわれていく。

第5章「評言からみえるもの」(高木史人)では、『北白川こども風土記』が、話者や生徒たちの「評言」までを織り込んだテキストであることが論じられる。それらを読み解くことで、「過去」や「伝承」がじつは動的なものであることが明らかにされている。

第6章「綴ることと彫ること」(佐藤守弘)では、『北白川こども風土記』や『山びこ学校』といった作品を彩る版画について、検討が行なわれている。「[文集]とは、手軽なガリ版(謄写版)印刷によるテキストと版画によるイメージの組み合わせによって、学校教育の規模のなかで簡単に作りうる「簡易な印刷物」であり、それが戦後の国語教育、美術教育のなかに浸透していく一番のきっかけであったのではないか」(345頁)という分析は、地域社会の性格といった要素とは異なる次元で、『北白川こども風土記』をはじめとした教育実践の存立基盤を指し示している。そして最終的に「ヴァナキュラーなイメージ制作の実践」(350頁)として文集の制作過程が評価されている。

文集が基本的には〈ミニ・メディア〉(345頁)であるのに対して、「マス」のなかで流通していく可能性を宿したものが映画である。コラム8「映画『北白川こども風土記』と脚本家・依田義賢」(森脇清隆)は、映画版『北白川こども風土記』が溝口健二映画を支えた脚本家の依田義賢をはじめとした錚々たる顔ぶれによる合作であったことを指摘している。同作についてはまだまだ謎が多いようで、今後の研究の展開に期待したい。

第7章「関係性を紡ぐ」(池側隆之)では、

『北白川こども風土記』の制作過程総体を「ボトムアップ型」の「メディア・プラクティス」と位置づけ、現代的意義の抽出を試みている。

第8章「新編 湖から盆地へ」（藤岡換太郎）には虚を衝かれた。かつて『北白川こども風土記』に「当時京大の地理の教授であった父親から聞いた話をほぼそのまま文章にしたもの」（379頁）だったという「湖から盆地へ」を書いた生徒が藤岡本人であり、60年後に今度は自ら北白川地域の（再）調査を行なった成果をまとめたものである。長じて学者になった著者の専門である地質学と、人類史とが交錯するユニークな文章となっている。編者が、当時の教師に代わって課題を「再提出」させたということにもなるか。いずれにしても粋な編集である。

### 3. 総評

ここからは本書の論評に移っていきたい。

まず本書を読みながら頭を離れなかったのは、やはり生活綴方運動の代表例である無着成恭編『山びこ学校』とそれをとりまく状況だった。『北白川こども風土記』とは、ひとつの学校で始まった教育実践である点、実践を主導した教師が同世代（北白川小学校の大山徳夫は1926年生まれ、無着成恭は1927年生まれ）である点、商業出版を経て映画化までされた点など共通する部分をいくつも見出すことができる。その一方で、両者はさまざまな意味で対照的な作品とも言える。

たとえば、無着は『山びこ学校』が有名になったのち、自身について多くを語り、また他の人も彼について多くを語っている<sup>4)</sup>。一方で大山はといえば、「経歴については不明な部分が多く、著作等もあまり残されて」おらず、「なぜ〈こども風土記〉に取り組んだのかもはっきりしない」という（122-123頁）。

商業出版以降の状況についても対照的だ。同時代においてはジャーナリズムの寵児となった無着と『山びこ学校』だが、底本であ

る学級文集『きかんしゃ』は、ノンフィクション作家の佐野眞一が手探りの調査によって見つけ出すまで散逸した状況だった<sup>5)</sup>。それに対して『北白川こども風土記』は、コラム4にあるとおり、生徒の手による直筆原稿まで北白川小学校の郷土室に保管されていた（210-212頁）。

ここからは、特定の教師が前面に出ざるを得ない状況（山元村）と、そもそも前面に出る必要がない状況（北白川）との対照性が浮かび上がってくるように思われる。対照性の根底にあるのは、地域間の経済的・文化的な格差であろう。色々な意味で「豊かな」地域であればあるほど、ひとりの教師が背負う（背負わされる）ものは少なくなり、それは教師個人に対する関心を自然と抑制することにもつながるだろう<sup>6)</sup>。本書を読むことで、教育実践の「知名度」と「持続可能性」との関係についてもあらためて考える機会を得ることができた<sup>7)</sup>。

次に印象的だったのは、地域社会と大学人との関係が具体的に明らかにされていたことだ。これは、過去の大学人を「学説史」や「思想史」の対象としてだけでなく、「（社会）教育史」や「地域史」の対象として開いていくことを意味している。大学人も「教師」でありまた「住民」である。そうした、当たり前と言えども当たり前だが意外と忘れがちで、しかもいざ確かめようとすると難しい、そうした事実を明らかにすることによって、本書はいわば「学外」から学知を眺める視座を提供していると言える。もちろんそのような視座をふまえることで、ひるがえって学説史や思想史といった領域もより豊かになっていくことだろう。

上に述べたいずれの点も、本書が北白川という地域に根を張るかたちで展開された研究であったからこそ明らかになった知見である。「領域横断的」「学際的」とわざわざ強調しなくとも、あらゆる素材は元来「領域横断的」だし「学際的」なのだと、本書は具体的な研

究作業をとおして教えてくれる。

ひとまず本書の意義をそのようにまとめたうえで、以下ではいくつか気になった点を指摘しておきたい。

1点目について述べる。これは資料の制約があってやむを得ないことだったと思うが、少なくとも本書をとおして見る北白川地域では、女性の存在感が薄い。第3章で『北白川こども風土記』における女性の語り手の少なさが指摘されているが(229頁)、女性史・ジェンダー史的なアプローチは今後さらに行なわれてよいだろう。それによって、「大学族」(新たに移住してきた人々。主に学者・サラリーマン)と「花うり族」(土着の人々。主に近郊農家)とはまた別の、北白川地域社会の分け方ができるのではないだろうか。

またそうしたことを考えていると、北白川小学校の自主的な保護者会が「おやじの会」という名で2015年から活動していることをポジティブな実践例として紹介するコラム5の記述は、いささか素朴すぎるようにも思われてくる。

2点目について述べる。本書を読んでいるうち、「地域の歴史」を記述することと、「地域のための歴史」を記述することとの境界線が徐々に曖昧になっていくような印象を受けた。たしかに第5章では、「災害の記憶を生々しいまま受け継ぐのが効果的か、それとも時間の経過につれて歴史が伝説になりさらに昔語り／昔話のようになるのを認めた方が受け継がれやすいか」(264頁)という、いわば「事実の継承」と「伝説の創造」との葛藤が問いかけてられている。しかしその一方で、第6章では、『北白川こども風土記』のなかの版画において、「明治」や「石器時代」と思われる時代が描かれていることが指摘され、「土着」の人と「外来人的」な人とが集住している「特殊な地域において、共有できるものとして、「過去」が持ち出され、それが版画の対象となった」という分析ののち、「過去」を描いた版画が「児童たちの緻密な調査

に基づいた想像力」(349頁)の産物としておおむね肯定的に評価されているように読める。

つまり、「語り」や「想像力」にもとづいた「歴史」が地域社会の紐帯を担保するものへと回収されていく危険性に対して、少なくとも研究者の側は慎重であるべきではないかと思うのである<sup>8)</sup>。

3点目について述べる。第6章では「ヴァナキュラーなイメージ」、第7章では「メディア・プラクティス」という観点から『北白川こども風土記』を読み解いていた。いずれも現代的な観点から『北白川こども風土記』のポテンシャルを(再)評価するもので、それはそれとして興味深いものであるが、ここではまず鶴見俊輔の「限界芸術」論を援用すべきだったのではないか。

鶴見は「芸術の発展」という文章のなかで、「芸術」というものを「純粋芸術」「大衆芸術」「限界芸術」の3つに分け、「限界芸術」を「両者〔「純粋芸術」「大衆芸術」〕よりもさらに広大な領域で芸術と生活との境界線にあたる作品」<sup>9)</sup>とした。そしてそれを「純粋芸術」や「大衆芸術」の土台になるものと位置づけたうえで、「職業として芸術家になる道をとおらないで生きる大部分の人間にとって、積極的に参加する芸術のジャンルは、すべて限界芸術にぞくする」<sup>10)</sup>と述べている。

この鶴見の論は、まず内容自体が『北白川こども風土記』と、とりわけ第6、7章で着目されている側面と重なる。さらには『北白川こども風土記』出版の翌年である1960年に発表されていること、柳田国男の仕事に依拠していることなど、本書の資料としても無視できない性格を具えている。

たとえば高度成長期における「限界芸術」の実践例として、『北白川こども風土記』を考察することも可能だったのではないか。そしてそうすることによって、本書の歴史叙述はより立体的になったように思われる。

#### 4. おわりに

以上、評者なりに本書を読み解いてきた。民俗学や教育史の専門家ではないため、的外れな指摘もあるかと思う。ご寛恕をいただきたい。

民族学者の梅棹忠夫が『北白川こども風土記』について、「おどろくべき本である」と賛辞を送ったことは、本書のなかで繰り返し言及されているとおりである。そして、「おどろくべき本」について書かれた本書もまた「おどろくべき本」であった。ただもどかしいことに、評者の筆力では本書の魅力を語り尽くせていない。なぜなら、本書はテキストのみならず造本にまで編著者が積極的に関わり（404頁）、さまざまな工夫がこらされているからだ。

この書評を読まれた方は、本書をぜひ実際に手にとり、その目で見てほしいと思う。資料の質感をそのまま焼き付けたようなカラフルな造本に圧倒され、学術研究を他でもない「本」というかたちで世に問う意味について、あらためて考えさせられることになるはずだ。本書は資料の「展示」ということにもきわめて意識的な珍しい本であると言うことができる<sup>11)</sup>。

本書が呼び水となり、今後さらに〈こども風土記〉研究が活発に行なわれていくことを願ってやまない。

#### 註

- 1) 金田章裕「学校で地域を紡ぐ」『京都新聞』2020年8月16日。
- 2) 和崎光太郎「書評 『学校で地域を紡ぐ ——『北白川こども風土記』から』」『京都民報』2020年8月30日。
- 3) 石原俊「コミュニティ・メディアをめぐる豊かな水脈の地平を指し示す——子どもを主体とする「ボトムアップ型」文化運動の潜勢力」『図書新聞』第3464号、2020年9月19日。
- 4) 佐野眞一『遠い「山びこ」——無着成恭と

教え子たちの四十年』新潮社、2005年。

- 5) 同上。
- 6) これはほとんど放言になってしまうが、もしも無着成恭が北白川に着任していたならば、何人も「面白い先生」のひとりとしてその教師人生を終えたのかもしれない。逆も然りで、もしも大山徳夫が山元村に着任していたならば、戦後教育を代表する教師として名が知られることになったのかもしれない。
- 7) 奇しくも本書とほとんど同じ時期に出た、駒込武編『生活綴方で編む「戦後史」——〈冷戦〉と〈越境〉の1950年代』岩波書店、2020年でも同様の問題が論じられている。評者も同書所収の論文「『大衆』と『民族』のあいだ——映画『山びこ学校』をめぐる市場』において、生活綴方の映画化に際して生じた葛藤について考察した。
- 8) 地域社会と歴史研究(者)との関係については、馬場隆弘『椿井文書——日本最大級の偽文書』中央公論新社、2020年から示唆を受けた。
- 9) 鶴見俊輔「芸術の発展」阿部知二ほか編『講座・現代芸術1——芸術とは何か』勁草書房、1960年。引用は鶴見俊輔『鶴見俊輔集6——限界芸術論』筑摩書房、1991年、6頁。
- 10) 同上、7頁。
- 11) 歴史資料を「展示」ということについて、歴史学者の柳田利夫はドキュメンタリー番組や展示会に言及しながら次のように述べている。以下に引用した記述からは、本書の特質について考察するにあたって示唆を受けたので、長くなるが引用する。

曖昧な記憶しか残っていないので恐縮であるが、展示という言葉から、随分昔に見たNHKのドキュメンタリー番組のことを思い出す。公文書の漏洩により、政府により長年にわたり秘匿されてきた事実が公になったことについての番組であったかと思うが、体育館のような広々

とした空間一面に、びっしりと定規で測ったように美しく公文書のコピーが並べられている画像からその番組は始まった。奥行きのある空間は遠くに行くにつれて照明の光量が落とされ、一層その広がりとそこに並べられている文書が量的ならず質的にも無限であるかのような演出もなされていた。そして、その番組の要所要所で、その画像が何度か繰り返し挟み込まれていた。CGで作成されたものではなく、実際に番組のスタッフが数千枚のコピーを作成し、それを丹念に一枚一枚床に並べて撮影したものであった。もちろん、一面に並べられている個々の文書の内容が読み取れるはずもなく、その意味では番組が本来伝えようとしていた文書の内容とは一義的には何の関係もない、作られた「絵」に過ぎない。しかし、番組の中で個別の文書を介して明らかにされていった事実の重大さは、その画像によって私の感性にしっかりと繋ぎとめられていったように感じられた。〔中略〕また、江戸時代における商家の活動をテーマにしたある展示会では、商売の相手先毎にその取引状況を記録した大福帳と呼ばれる分厚い横長の帳簿が二十冊

ほど綴じられたものがアーチ状に展示されているのを目にしたことがある。こちらもまた、具体的な大福帳の記載内容はほとんど見ることはできない一方で、時間の流れと商業活動の広がりとを、その古びた和紙の塊のボリュームで私たちの感性に訴えてくるところでは、先ほどのNHKのドキュメンタリー番組の一場面と通底するものがあるようである。歴史的な文書に記載された内容よりはむしろ、その物理的な形状や、置かれ方、展示空間のありかた、照明のあて方などが重層的に私たちの感性に訴え、伝えるべき情報の量と質とを併せて私たちの脳裡に刻んでくるように感じられた。それぞれの資料に記録された情報を文字に起こし、数十冊の資料集として並べることに劣らず、おそらく多くの観覧者に対して、より直接的で体感的な刺激を与える結果となったのではないかと思う。(柳田利夫「アーカイヴをどこから見ているのか——研究フォーラム「生成するアーカイヴ」に参加して」慶應義塾大学アート・センター編『芸術とアーカイヴ——ジェネティック・エンジン』慶應義塾大学アート・センター、2019年、40-41頁)